

豆名月

泉鏡花作

明治四十四年十月

今からざつと二十三年前、私が大塚町に居た時分のこと、丁度舊の九月十三夜の晩の月がよくつて、
亞鉛屋根の黒く塗つたやつが、霜を置いたやうに見える。
通りに足駄の音が高くきこえて、家へ見えられたのが横寺町の先生と柳川春葉君、もう一人誰かぞ
お供をして来たが、思ひ出せない。其の時に、先生
が傍の半紙へかういふ戯れ書をなすつた。

雨の晴れたるを嬉しく二三子と浮かれ出て大塚の門を叩く。

拝めその玉の傘干す十三夜

別にお愛想もないので、近所から餛飩か何か取つてもてなした。そこで私がもてなし氣を出して句を詠んだが、甚だうまくない。

冠者くわんじゃ召してまめめいげつ豆名月のおんひろひ

すると春葉君しゅんえふくんが脇わきをつけた。こいつが餘程よほどうまい。

これは此このあたりにすめる蟲むしの音ね。

先生せんせいの十三夜やの句くは句集くしふにも載のつてゐないと思おもふ。